

## ～背景～

医療評価委員会から、レセプトのオンライン化により全ての医療機関・薬局を結ぶネットワーク基盤が整備された段階(平成23年度当初)では、患者による処方せんの内容の確認、薬局の自由選択性を担保した形で処方せんの電子化の実現が可能となるため、現時点から積極的に検討を行うべきである、との提言

## ～医療情報ネットワーク基盤検討会(座長:大山永昭)～

処方せんの電子化について、医療機関側からの視点のみならず、薬局、患者といった関係者それぞれの視点によるメリット・デメリットについても明らかにし、平成19年度に検討を実施

## ～処方せん電子化実現に向けて検討すべき点～

- 患者等が利用する物理媒体等を含めて、患者等自らのコントロールによる薬剤情報の蓄積、閲覧等の活用方策と、認証や安全でコスト負担の軽減された、網羅的なネットワーク基盤その他の環境構築
- 記述様式やメッセージ交換方式等の標準化、後発医薬品を念頭に置いた一般名による記載を考慮したマスタの開発と全ての医療機関、薬局において標準化されたマスタを利用する環境の整備
- 全体最適にかんがみたコスト負担や制度面での担保も踏まえた、電子化した処方せんの運用スキーム

## ～結論～

- 現状において実現するには検討すべき点も多くあるため困難であるが、想定される課題は、コストベネフィットにもかんがみて実現しようとする際には、いずれも将来にわたり解決不可能な課題ではなく、処方せん電子化の実施が今後とも困難であるとする結論にはならない
- 課題として掲げた各項目は、必ずしも一度に全てを解決しなければならないということではなく、環境の変化、準備の進捗状況等も踏まえながら、電子化の段階的進展もありえる
- その際も、安全を確保することは当然ながら、我が国の医療保険制度の根幹である「患者による医療機関・薬局の自由な選択(フリーアクセス)」を損なわない運用の確保が必要であるとともに、時代を経ても陳腐化しない、また部分最適化とならないような特段の配慮が必要である